

# 食物三徳御書

弘安元年 五七歳

たからとす。山の中には塩をたからとす。魚は水を<sup>親</sup>をやとし鳥は木を家とす。人は食をたからとす。かるがゆへに大 王は民を<sup>親</sup>をやとし、民は食を天とす<sup>書</sup>とかゝれたり。食には三つの徳あり。一には命をつぎ、二にはいろを<sup>色</sup>まし、三には力を<sup>添</sup>そう。人に物をほどこせば我が身のたすけとなる。譬へば人のために火をともしば我が<sup>前</sup>まへあきらかなるがごとし。悪をつくるものを<sup>養</sup>やしなへば命をますゆへに気ながし。色をますゆへに眼にひかりあり。力をますゆへに、<sup>足</sup>あしはやくて<sup>速</sup>きく。<sup>手</sup>かるがゆへに食をあたへたる人、<sup>利</sup>かへりているもなく、<sup>弱</sup>気もゆわく、<sup>報</sup>力もなきほうをうるなり。

一切経と申すは紙の上に文字をのせたり。譬へば虚空に星月のつらなり、大地に草木の生ぜるがごとし。この文字は釈迦如来の気にも候なり。気と申すは生氣なり。この生氣に二あり。一には九界